



異人恐怖傳  
後編  
全

出所 刊行 年月 嘉永三年庚戌三月	著者 黒澤翁満	冊數 共 三冊	異人恐怖傳 後編	第 號
----------------------------	------------	---------------	-------------	--------

ル 3  
3652  
3



門 3  
號 3652  
卷 3

不  
限

刻異人恐怖傳論

武藏國忍

黑澤翁滿

忠談

一人小上智中智下愚あり理よ大理小理あり道あり我神の道ハ大道よて大理たるまバこそを學ぶよ大智の人よあうざまバ信がこと事多きあるべしさるる神代の古事など記されし様のいしく靈しく異しきを今世に現小比較づく見し時ハいしく思ひ係ぬ事のみなるを以て中智下愚の人ハ大かく寓言虚誕なりとて疑ふほど小末竟小言腐れあどもさるるを然もど



○恐怖傳論

一

も志々靈々異々々々ハ原来天地の形状なきバ唯上智  
の人々々々神代々々の傳説ハ真の大理ありこやを  
深く遠く慮り信て今世ハ物事の光景も此神の道ハ漏  
ぬこをバ覺るる凡儒道ハ小理を説くこや判然たる  
ハ中智の人ハ信悦ぶ道ありを世ハ中智の人多々  
バおれづろ弘く行をせしむるは漢土の道  
ハ所謂伏羲小まれ堯舜よまれ其元ハ人の考へ定め  
る事あり次第小世の態ハ合せし然もはるる人ハ  
信べまやろ小説爲ししものなるハ中智人ハ一向

打憑て此道の外ハ道といふ物ハなれど如くも  
思ひ言ふあり然も其ハ皆人智ハ考へ出せる道な  
るバ狡黠はろく却ては世の理義ハ合しぬ所もはるを  
以て上智の人ハ猶肯てぬ類も多々下愚ハ其道の煩累  
ハ困下て悪を厭ひなるともするなれど佛道ハ空  
理を小さく説く故ハ下愚の耳ハ入易くして下賤婦女  
子の類ハ信仰する者多々たるは佛道ハ甚く  
異様なるもの少く並てハ虚偽を以て悪俗を嚇し  
て矯直さんと構へしれど空理の中より種々の相を現

ト来りて何事も此道に漏ぬは尙不説為つ天地萬物の理を三世因果の盡しし如くたゞも其根源の悉く虚寓の方便より出さる故に上智中智の人ハ其虚偽を憎み其拙陋を嘲りてをさく信容る人も多きを唯下愚をんさる根源を知るべくもわらざる只管其説諭を事を信実とて受て又た道と尊み崇むんは愚癡の凝固する類ど多し我大御國ハ神道にて事足る具たりとて國柄なりしを中頃儒佛の道渡り来てより已來事の瑣細は委曲となりて善き事ある不

しもあゝも亦國體を損トする事も少くは試小其由をいそぐ儒道ぬ善き方の事ハ上古ハわらうに省約てわらうを文飾の事出来てよりは君の尊さも親の辱さと今一際する事と知ま又其文字して萬の事を書記しあどをる事ハ便利なるあどなり然まはれ何事も然一箇づ理をいひきて瑣細は穿鑿や究めんとするは小自然小詐偽といふ事も發せ又ち便利ある小就てハ奸謀を企る媒ともなりて却てハ唯一まぢ小誠実ありて素朴なりし上古は及ぶぬ事と多し佛道して善

き方々愚昧たる俗男女の暴人なども死て行くさたの  
事なくも小驚き懼きて聊心を改むるもあり又其作善追  
福の業なごめくわのづゝ心の和む事あるなどの類か  
るなり然もこれハ惣て悪うめるもの為小益あるは  
こゝろ素より善人ハ用ぬぐた道あるに他を誹謗  
し自を押立る所あり頑愚の心を凝結して我慢徒黨の  
風を發し終よハ天下の災害となりし事も多し然ハ  
あまでも此三の道相行をまきて世々を重縁来つゝ小近  
き年頃より蘭學といふ事行をれ始て西洋の國風を学

ぶ事となりぬ其道ハ大理小懸てハいゝゝ疎き物なれ  
る大智の人は笑ふ事も多きことと小理のうへを究理  
し人ハ耳目を驚く事多きことバ今世は人氣小合ふ  
るや此學小志くめのれく一向小流行して蘭學をせざ  
る者まゝ頻小眼前は小理は伏して日本の國風を忘る  
やうよけんたるははいゝゝ歎く事は限といふは  
約莫西洋諸國の風ハ眼前の物事をせさばふ  
理を推究めりてゆたて竟よハ天地の大なる形状をも  
推測して是れ萬理を盡しゝりと思へる事なれと

其ハ〜人の智慧算術の届る迄に限りこそあまき真の  
靈〜異〜妙なる理ハ知得べき際ハ何〜此天  
地の初發〜天地の動く理人身の生ま出る縁故  
ま〜其生活〜理な〜猶奈何とも知るべきよしなり  
然ま〜其國人の智は極競ひ考へ〜のなるま〜  
すぐに用ゐる調度の機関ま〜物と物と交〜製る薬  
などハ意外ある事も〜中智下愚の人どもハ皆驚  
き崇びて真の似る道なりと思ふありさま〜猶克考  
ふま〜その調度藥物あ〜も大〜ハ無〜事關ぬ物

なる小徒小人の精力を費して〜驕奢の基と  
なる事も〜上智此人ハ更ニ採用する〜  
て邪智小長け柔弱小流〜皆是外國風小移るも  
のな〜佛の輩ハ國恩を忘〜漢天竺の爲ハ 御  
國ハ仇〜此者を昔より〜有とも聞〜  
を蘭字の徒ハ〜西洋の爲小國恩を忘〜  
お〜た〜事〜爲出 國家より罪〜  
〜と〜ぬ〜人氣を釣〜こと他道〜よりも巧なり  
と〜抑日本ハ武國〜人むのづ〜猛く雄々

〜其強きこと萬國小勝まゝるる國風ある以上も  
るごとくはまゝく外國の弱き風は押移り近比ハ殊に西  
洋人の真似をして好事とめし思ふやうな事もあるか  
つてもなほも歎かた俗習とりよる近古までも日本  
人の強りりし事ハ源平より已來世々其軍記戦争の書  
を讀ても知るなくまゝ此書の中にもケンブルが驚き  
歎じて記しける長崎の賈人濱田兄弟が事ありて  
考ふべし惣て外國の書どもを見るに日本人のごとく  
敵に向ふ最初より神水を吞て死を究めんハ北とも北

じんハ引とも引じ唯君の為家の為小千騎が一騎とな  
るまでも太刀の刃は續りんほどは斬死ふまゝなり  
風ハ絶て一箇も記しけるを見れば其中の魁も  
を一人二人討つるに蜘蛛の子を散らすが如く  
逃亡したるは其根柢利慾の為より起りて忠魂義膽  
の乏しき國柄小因るなるべしさき巴豊臣太閤の朝鮮  
を攻伐するに時僅小肥後半國の主たりける加藤清  
正朝臣の籠らまゝつる蔚山の城を明朝鮮の全國其力を  
盡して攻めるよくなるとも陥り得む徒小食攻め

餓疲せしるも猶衆入る事を不得せで竟は援兵の  
為に斬崩さきて逃散するをどいつく怯く拙き事り  
むりりなきは明朝鮮の弱兵ともなきは西洋諸國の  
兵とは異なりあどもいふはなすどかのをりを明より  
憑きて西洋邊の兵をも備ひ来りて遠國の使者の  
来り居るを駈催して大砲を打せたりとて状の彼處  
よて記せる書小所見するも共小手痛ま戦はるを逃  
散する景迹をみて頼むは足ぬ事をば知れし又同時唐  
嶋の戦は加藤嘉明朝臣拔駈して僅は五人衆する小

舟小く敵三百人をりり乗する大船小漕着飛入る小  
引する弓をさふ放ち得む皆おめく斬屠らるるを  
いうむりり微弱き朝鮮人なりとも然むりりの多勢ゆ  
打負べし理はあはれと勇武ハ勢の多少はよるべ  
唯魂の利鈍ふよる物なれば思ひ切る敢死の勢小氣  
を奪をきて敢なくかゝる負をばせしむぞ有る兒約莫か  
くは如くなる事どもを今人の常小思ひ言ふありさ  
どもと比較べても見ざるは國の為君の為は御大事と  
あゝんをりにする蛮人ども小打負て徒小家の恥を



大砲の音おと小聞懼こみして逃にて帰かえらんと思おもふ人ひとやあるをき  
惣むすて 御國ごくに小生こまる人ひとハ自然じぜん小強こづよきこれを和魂わこんといふ  
今人いまのひととて各おのづから此魂このたまハ持もちたぐら外國とらふの為ため小覆おほはれて有あれ  
いと無なか如ごとくなるは口惜くちき限かぎなくばや此和魂このわこんといふ  
事ことと 御國ごくにの古學こがくひけてより人ひとと頻ひんふいふ事ことのやう  
な事ことでも古ふるくよりもしひい事ことや今昔物語いまむかしものがたり小明みやう法ほう博はく  
士助教せあじょう清原善澄きよはら ぜんじやうといふ人の盗人ぬすびと小殺ころさる事ことをいふ  
段くだ小ざるハいみじかりき事ことどもは申まをやもことごとくいひな  
くりくるわのやく云云まごと見えりり拭ぬきも恐惶くわうき御事ごんごと

なれども今の現いまのま 今上皇帝いまのじやうてい禁中きんちゆうの御學問所ごがくもんじよあり  
御學則ごがくすべも和魂わこんの事ことを專せんとせさせ給たまへる由是よしを兼かねり  
又大江戸おほえどの 遠とほの朝廷ていてい少すくく蘭學らんがくハ御取用ごしやくようなりといふ  
こや令制のりまさせ給たまへる由是よしを兼かねりて共とも小大おほとく尊たうとく有あり  
難がたく覚おぼゆる小はけても 上うへが上うみハ如此かく有あり 大御意おほみこころ  
御座ごうりさめの依よ下しもが下しもとて已おひが意こころのまも不得えも得知とち  
ぬるるを喧囂かがましく轉まりらわが慷慨うれさ小此書このみやを世よ小弘ひろ  
くしてさる輩とも小目めを醒さまさるめんと思おもふハ聊いささ赤心せしん報國ほうこく  
の微意びいけりたるや

一世ある事ハ何事も 國家の御制度はまゝなるもの  
なきは下が下とてハ少くもいふなき物ハ何れも  
況て津々浦々の防人仕事など不至アてハこそ  
國家の御定はり且深き御思慮御座まゝて嚴くに備へ  
させ給ふ御事なれば毫も外より窺ひ知奉るる  
事なきぬを弥下が下とて左右論ひあどすべき際  
ハ何れも唯日本ハ強く外國ハ弱し殊更 君が御稜  
威めて幾千萬の異國船寄せ來るとも事もれく討平ら  
げさせ給ふんずむと 國家を憑りて思ひ委ね奉

アて已々が産業小心をいひ世を安らぐに暮まれば事  
なるは近き年比アメリカイギリスなるの船も此時々  
參來る事あるに就て其身も相應りぬ市人村客  
の輩あどもでおのづから産業も忘れて唯其事をいひ  
といひ論ひと論ふ事ども第一 上小憚らば日本の英  
氣を塞ぐは當アて聞棄がた事のも多し上のも云る  
如口を噤めてあゝむ者ハいふまゝもなき事ども若志  
何れん者ハかゝるをりよを人の心におくまじやうに  
假令日本ハ弱くとも強しといふんこそ本意なるべけれ

況ていぢんや外國ハ弱く日本ハ強きこと古今其跡奉  
て算へ難し其が中少も弘安四年といふ年小かの漢土  
を悉皆伐後へて奪ひ取や蒙古の忽必烈といへる王  
十餘萬の軍兵を渡しおこせり攻りしと四國九國の  
武士ども小度々戦ひ負終ふハ神風の為小船を覆され  
て絶小三人生て本國へ歸りし事あり此事を太田道  
灌の書アとていふ徒然草といふもの評して唐人と蒙  
古人との強弱ハ唐人の弱きこと論を俟て日本人と蒙  
古人とを比ぶるハ神風の為小船を破らるる後も猶

三萬餘人鷹嶋小在るを日本人押寄て戦ひしハ悉  
く生擒まぬいさむり戦ひ疲るるとも我國の人あは  
三萬餘人悉皆生擒る事ハいさむるべし是れ蒙古  
人の弱きを知らしむるに似たり實小然る事あり此事  
を元史小徴とていふに曰八月一日風破舟五日文虎等諸將  
各自擇堅好船乘之棄士卒十餘萬于山下衆議推張百戸  
者爲主師號之曰張惣管聽其約束方伐木作舟欲還七日  
日本人來戰盡死餘二三萬爲其虜去云云と見えしハ神  
風を免るるハ悉く捕へらるる誅をまじりたるべし此

より前文永十二年十月も蒙古高麗の軍を併せて一萬  
五千むりり對馬壹伎の嶋々へ襲ひ来りし小對馬少て  
國府の地頭宗右馬允助國一族郎等八十餘騎をわく  
馳合せく散々小戦ひ壹伎あくハ守護代平内左衛門尉  
經高百餘騎少て出迎へ戦ひて共小潔く討死せり其後  
小九國の軍士大勢押渡りて蒙古の軍を駈散せし不同  
月の廿一日神風大吹起りて賊船多く巖石小碎りて辛  
らして高麗小逃歸り長を以ても想ふる終小八十  
騎百騎の小勢あく一萬五千の大軍小向ひく氣を呑ま

ぞ戦ひく死しり我 大御國の武士は甚しく猛き  
事も其神風も弘安の度けりなれど文永の時もあ  
やまらばりし事をさすべし今も何ぞ萬の一少も然る  
事ありむよハ 國家の命を蒙りて數萬は兵士手痛き  
戦を遂て討伐め追攘せん事ハいふや及ぶ我 神國  
の御稜威違ふことなく文永弘安の如き神風も必頻小  
吹起りて賊を平げ給せん事毫も疑ふ事事を切小思ひ  
憑も奉りてあるはくこ我  
一下が下りて論ふるくぬ事を喧囂しく街巷小唱り

を聞くふ其謂ふ所種々小分まつり或ハ云異國といふ  
中亦も今世ハイギリス威勢を得て數百艘の軍艦をめて  
天下小縦横し國々を攻伐つこと夥しく其向ふ所破ら  
ざといふ事なり其舟の廣大なる事海小浮びく山の如  
く是を海城といふ又其船の堅きこと海底の巖をも乗  
崩さざりたるをいふたる大砲も打抜く事あり又  
其船小近づく時は巖壁小向ふが如く船もバ翅たつてハ  
登り難し此小乗る異人ども帆綱をあやめ事巧み  
て追風亦も逆風亦も疾走ることや意のまじなりそれ小

加ふるに蒸氣船といふ火船をも自由小たるはこや人の  
目を驚く大洋を陸よりも便利と心得し異人ども  
炮術小鍛煉し事ハ是亦目を驚くはむりあり大  
炮小炮一艘ごとく小數限なく携へこれを此船どもの向  
ふ所防ぎ戦ふは術あることやなりさきハ漢土も戦ひ  
負て彼が属國となりしや今ハ日本を攻んとく先一二  
艘づの船どもを物小托し此處彼處の湊々を来り  
むるなり僅小一二艘の船此来るに所の騒動大なり  
ありざるを數を盡して寄來る事もありむとやあらん

かくやあゝんなど人の恐懼おそわきやうなる事を憚たふる所  
もなぐいひめてもやれば皆かの蘭学者流の癖くせふて已  
が西洋せいやうの事小委曲せいきうきを誇うたげ且彼方を主張しゆちやうして人を赫おそ  
まひか心得こころえあるを奇きを好むハ世人よめひの習なまを聞き續つぎ語  
續つぎて何の辨わかへもなくいと罵ののましく唱となふたり寛仁大  
度との 國家こくがの御目おんめよりハ童兒どうじの戯あそれ如く御覽ごらんとて聞  
食流めりさせまふべう免ままごと若正わかしきら小事こごとあゝん時の為ためを  
思おもへど人ハ臆おそれを招まよく事こともあゝんうと密ひそ小眉こまゆを擧あげ  
とちたうも有あるぞう其小就こつて或ハ又云またいふ船ふねと砲たうとハ

彼かれが得える所ところ御國人ごこくにんの得える所ところなり其得そのえる所ところ  
をめぐ彼かれが得える所ところ向むかふハ譬たとへば己おのが師しと人ひとと  
藝ぎを争あふが如ごとくあゝいゝあゝても及および難がたき理りの見みゆる  
より疊かさの上うへは舌戦せつせんめと敢あなく蘭学者らんがくしゃどりも勝かつつて  
得えるおれづらやま和魂わこんを損そふ端たんとなる事ことあれば船ふねと砲たう  
とハ姑またく止やめて日本流やまなまのひと責せめ攻せめば海城うみやうといやも  
何あれどの事ことうらるるる彼かれハ粧飾よそぢめく嚇おそまし流りあまさバ日  
本流ほんりうとハ甚おろろなり親打おやうちるれども衆超しゆえん子打こうちる事ことども  
衆超しゆえんといふが如ごとき手痛ていき戦いくハ日本やまの外がハ曾そうてある

こやあく是ぞ則日本の勇武は海内は溢まらるる慶あれば  
然らん時はハ氣を吞まそ彼ら粧飾の大炮も何も打得  
ざらん事必然なり約莫合戦ハ氣を以て第一とす事小  
て強小器械は長短ハ因む況て大炮などを頼る勝  
負を決まべきめのふあは筒口を揃へる大炮の中  
へと響を並べく馳入ん事元龜天正の比は軍立は如く  
あらんハ大炮あど頼む軍ハ更も放つめも至らば  
てひる崩れ崩るべきこと鏡小照して見るが如し又嚴  
く構へる城中へも蟻附して乗入る勢を以てバ鏡壁

の如き大船なりとも乗取ん事何の難き事ハ何ん  
か此弘安の古も河野六郎通有といふ人も帆牆を橋と  
して蒙古が船小乗移り大友散位藏人といふ人ハ纒小三  
十騎を率て敵船小乗入共小大に功名して首数多捕  
て回アぬさきバ昔より嘉明朝臣の唐島は船軍の如き  
戦ぞ我御國風の軍なれば彼れいりやりの大炮巨艦  
有とてと畏るふハ是む君の為祖の為ふ必死の勇力を  
盡さん我御國の武士小對してハ西洋諸蛮の賊ども  
かの唐島小て韓人らが刺るる箭をぶつ放ち得むして

打負うちまひとりたる事ことの如ごとくなるべしはもこバ異國いこくより數多あまう  
の軍艦いんかんを推向おしむけて 御國みくにのいざ御大事おんじだいとあらん時ときハ  
柔弱ろうじやくき婦女めいごも出火しゅつかといハ覺おぼえぬ警力けいりきの出いるが如ごとく常じょう  
小隱せういんもつる勇武ゆうぶも顯あつきたのづりり日本流にっぽんりゅうは手痛ていた  
戦いくさと成なり終はつ小打平せうぢやうへいげん事ことハ中々ちゅうぢゅう小安せうあんくる危あやまること今いま  
此こ如ごとく一二艘いちにさうづの船ふねもはうはさく来る小つげりハ  
下しもとちちぞ彼此たがひは事ことより小迫合せうせりあひの起おこるまじりた扱ありも  
何なにも然しからん時ときの為ためを思おもへハ船ふねと炮たうとの主客しゆかくは論ろんめて  
衆人しゆじんの和魂わこんを損こふ蘭学らんがく者しやは流言りゅうごんこそ大だいどく 御國みくにの

弱よわきともなはなはだききバいづく此和魂このわこんを鎮おさむる為ためハ  
國家こくがハ本ほん来種らいしゆ々の御備おんそびども嚴かんあえれば船ふねと炮たうとの  
外ほかハ如此かゝる有御備おんそびもありとい事ことを衆人しゆじん小見こみせも聞きせも  
するよりしもがれあどもいひ或あるハ又云遠またいひく漢土かんちの昔むかしを  
考かんがふふ元の至元しげんといつる年としの間まより明みんの嘉靖かせいといつる年とし  
の末すえまぐ倭寇わこと唱となへく甚しつどく驚おどき懼おそき殆たいてい國中ちゆうこくの騷動さうどう  
たりし事こと漢土かんち朝鮮ちやうせんの書しよどもよ大概おほむね年々としとし記しるはるこも  
あく明みんの中ちゆう比ひよ至いたりてハ殊こと小甚せうしつどく此災害このさいがいハ罹ありて  
國民こくみんの死亡しつじやう國用こくようは費つひえも夥おほかりりば其防そのぼくはた術ていじゆ



をもさめく小議論せうぎろん……状実小驚じやうじつせうきやう……事あり小  
我御國の書ハ曾てかゝる事の所見しよけん……事あり小  
た四國九國の浦々鳴々うらうらなげなげに暴人ばうじんどもの世よに亂みだれ小為術せいじゆつ  
なくして彼處へ渡り行く盜賊たうさくをせしむる事あり小  
彼處の暴人ばうじんども其を據とらへて却て案内おんないし導みちびきて同  
じやう小盜賊たうさくをせしむる……といふ事ことの善惡ハ姑  
く置く是れも日本人の武ぶく雄々ゆうゆう……事あり小彼處小  
アさば多治平の世ちへいに不意出来ふいでき……事あり小彼處小  
て甚く驚おどろか恐おそむる……理ことわりなりハ非あやむる……事あり小是

小依せういて考かんがふまは近來ちんらい參來さんらいる異國船いこくせんども何なにも其國の  
王命わうめいなりとやういふ……疑うたが無な……事あり小難がたらる  
處ところ若わかかの漢土わんちに倭寇わこ小等ひとら……賊船さくせんなどあり小來きる  
毎ごと小誘よびき寄よせて鑿くわとなし其船そのせんを燒棄やきすてるハ屢しばしば續つづく船せんも無な  
る……立地たちぢ小根ねを斷たぐ國の愁うれを拂はらひ清きよむべし日本にっぽんの  
強つよき……海内かいなんに溢あふま……上うへ小日本海にっぽんかいの荒あき事ことも  
他海たかいの類るい小あ……び……事あり小彼が能よく知しる  
處ところなり……彼王國力を盡つく……漸やり小攻得せうとく……事あり小彼小  
損多とんたく……益えきある事あり素もとより損益とんえきをの……主しゅとす

戦たるも不ふ便べんの軍を思おもひ發はせざるにもハ海賊うらぐ  
の疑うたるに非あらざるハ西洋さいやうの書しよ小載せうる所ところ小因せうて彼からこり  
此國風こくふうを考くわふるに大おほく其國用こくようは常つね小乏ちひき故ゆ小諸しよ  
國小渡こくわたり行ゆく交易かうぎをなす其その中ちゆう小たたままく弱じやくしと見み申まる  
國こくらもバ押領おしりやうする事ことあらど有ありし聞きゆきと原もと來きた其その産物さんぶつ  
貨財かさいを得えんとすままでの事ことなれば損益そんえきを以もて根柢こんていと  
すすここややハいふも更さらあらははるるバ志こころ遠とほき境さかい小軍いんぐんせんと  
て先國用まづこくようを費つひやして押來おしきたらんなどの事ことハ大おほく有ありし  
く覺おぼゆきバあらりして又また其その戰爭せんそうの事ことあらど記ししてゆて

各國こくごの人数にんずうを考くわふるに國力こくりきを盡つくししんと聞きゆき時ときも僅わずか  
小二三せうにさん十萬じゆばん以上いじゆうは出いで我われ全國ぜんこくの軍勢ぐんせい小比くらべ見みるるバ  
いといともも寡くわく敢あるる事ことともななるるバ假令かじやう王命わうめいあられし  
ととく恐おそるるも足たりしと防禦ぼうえいの術じゆつ小かからり有あるるし  
尤とも右みぎも今いまの如ごとくく年としを經へらるるる倭寇わこ小惱なるる  
漢土かんちゆのごとく大おほく此國こくの費つひやゆき何なんよりも忌いやむる御おん  
大事だいじあるるにからずハ葉はを分わかても考かんがへまりし事こと  
なりなりあらずも云いへし上うあもいへるる如ごとくおおけなるる御事おんじとも  
を下したが下したとと云いへし論ろんへる罪つみも免まならずも難がた々々れれども

是等ハ神儒佛の道々小心をよする輩あどの 國恩を  
思ひ我を忘まそかの蘭学者流小争へる説どもたまこバ  
津々浦々の防禦人あど此心得の端とならん事もある  
なぐ且和魂を鎮むるもたずおんよた事と聞ゆれを  
猶世小弘く云せまりくこそおぼゆき  
一 今世西洋舶来の書とて人々争ひく持栄まかの國風小  
魂を奪とる書此類よハあぐで此書ハ蘭人ケンブルガ  
口より正しく我 大日本の國風を天下小比類なく善  
き國風なりと讚称へ又御國人の強きことを是も天下

小比類なく怖称へる書なり外國人の眼よりと  
さぐり小見ゆる 御國小生きて却て彼が虚飾の威  
小惑さそそ恐るハ愚昧よ遺憾き限なくや予按小  
蘭字類小行とて小就ては其学せざる者もで西洋風  
深く心小染着く何事も彼を勝まると思ひ真似一羨む  
今世の俗習たまこバさる輩の耳よハいうやうに論解て  
も容易く所念を翻せめれよハあぐで況て皇國學する  
輩たぐいのり事ハ不負魂ぞと心得くならく小傍痛  
き事小さん思ひ言ふたり然るに是ハ蘭人のいへること

なまは疑ふ者なく此上もあらん證據ありて 御國の勝  
まで強く尊く萬の國小秀する事を今の人小悟らむ  
るもは此證據小及ものなれば此度世小廣くなり  
かなん是を見是を味ひく 國恩は有難く辱き事を辨へ  
知ア和魂の鎮ともなる由あり大に幸といふなり  
さて此書ハ蘭人ケンブルが記るベシケレイヒンギハンヤツパン  
日本志といふといふ書の中より抄出し長崎の譯語家志筑  
忠雄が翻譯したるなり當時書中の意を採て假小鎖國  
論と題號せしハ全く忠雄が記したるより 譯例より見

を作者の意もあらざる故に今又更め異人恐怖傳  
と號けつ異人といひ傳といふ漢字のうへふはれて決  
めて論諫ぐ人有めど別と思ふ旨もある上は俗人小通  
る易くしめんとして聊も熟字の法小拘らむ唯寫本  
ゆく數多の字を歴し故に誤字脱字いと多く讀解  
難た所ありも有しを眼の及ぶ限ハ改め且譯者假字  
尔乎波の格を知むして根難ありしをバ聊補ひ正し  
ア寫本より見知しん人怪むべし

嘉永三年庚戌三月



